小林秀雄集

現代日本文學全集

42

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

筑摩書房版

現代日本文學全集　42

小林秀雄集

昭和三十一年二月二十日　印刷
昭和三十一年二月二十五日　發行

著者　小林秀雄（こばやしひでを）

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者　古田晁

東京都青梅市根ケ布三八五
印刷者　山田一雄

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所　筑摩書房
〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替　東京　一六五七六八

製本所　矢島製本
印刷　株式會社精興社
整版　株式會社精興社

小林秀雄集　目次

ゴッホの手紙……五
ドストエフスキイの生活……六七
「罪と罰」について……一四五
イプセン……一七二
ニイチェ雑感……一七七
チェーホフ……一八二
モオツァルト……一八六
パスカル……二〇七
ヴァレリイ……二一〇
ランボオ　Ⅰ Ⅱ Ⅲ……二一六
當麻……二三五
無常といふ事……二三六
徒然草……二三七
平家物語……二三八
西行……二四〇
實朝……二四六
中原中也の思ひ出……二五七
島木健作……二六〇
菊池寛論……二六二
菊池さんの思ひ出……二七〇
川端康成……二七一
三好達治……二七四
セザンヌの自畫像……二七五
ヴァイオリニスト……二七七
眞贋……二八一

金閣燒亡……二八七
蘇我馬子の墓……二九二
私の人生觀……二九八
文學者の思想と實生活……三二二
私小說論……三三一
樣々なる意匠……三四四
Xへの手紙……三五三
おふえりや遺文……三六三
一ツの腦髓……三七〇
ピラミッド……三七五
エヂプトにて……三七六
嵯峨澤にて……三七八
滿洲の印象……三七九
慶州……三八七
蘇州……三八九
杭州……三九三
杭州より南京……四〇〇
湯ヶ島……四〇七
蔦溫泉……四〇八
山……四〇九
カヤの平……四一一
小林秀雄（亀井勝一郎）……四一四
解說……四一九
年譜……四二五

裝幀　恩地孝四郎

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

小林秀雄集

言葉の力

小林秀雄

フランスに居た時、何処で買物をしても、値段が非常に安いのに気附いた。日本人の商人の様に算盤を使ふ習ひがないからではない。算盤を使ふにせよ、習ひ性となって、簡単な買物の値の計算やら釣銭の勘定やらが、なかなか速いのである。フランス人は、日本人に比べる

ゴッホの手紙

人生の謎とは一體何であらうか。それは次第に難かしいものとなる。齡をとればとるほど、複雜なものとして感じられて來る。そして、いよいよ謎な、生き生きとしたものになつて來る。

サント・ブーヴ

＊＊＊

先年、上野で讀賣新聞社主催の泰西名畫展覽會が開かれ、それを見に行つた時の事であつた。折からの遠足日和で、どの部屋も生徒さん達が充滿してゐて、喧噪と埃とで、とても見る事が適はぬ。仕方なく、原色版の複製畫を陳列した閑散な廣間をぶらついてゐたところ、ゴッホの畫の前に來て愕然としたのである。それは、麥畑から澤山の烏が飛び立つてゐる畫で、彼が自殺する直前に描いた有名な畫の見事な複製であつた。尤もそんな事は、後で調べた知識であつて、その時は、たゞ一種異樣な畫面が突如として現れ、僕は、たうとうその前にしやがみ込んで了つた。

熟れ切つた麥は、金か硫黃の線條の樣に地面いつぱいに突き刺さり、それが傷口の樣に稻妻形に裂けて、青磁色の草の綠に緣どられた小道の泥が、イングリッシュ・レッドといふのか知らん、牛肉色に剝き出てゐる。空は紺青だが、嵐を孕んで、落ちたら最後助からぬ强風に高鳴る海原の樣だ。全管絃樂が鳴るかと思へば、突然、休止符が來て、烏の群が音もなく舞つてをり、舊約聖書の登場人物めいた影が、今、麥の穗の向うに消えた——僕が一枚の繪を鑑賞してゐたといふ事は、餘り確かではない。寧ろ、僕は、或る一つの巨きな眼に見据ゑられ、動けずにゐた樣に思はれる。

人のすく頃を見はからひ、二階に上つて繪を見て廻つたが、あの繪の持主は誰だらう、手に入れる事が、出來るだらうか、とそんな事ばかり氣にかゝり、まるで上の空であつた。其後、知人の畫商達に會ふ毎に、くどくどその話をしてゐたところ、宇野千代さんが、誰から聞いたのか、知らぬ間にそれを手に入れ、或る日、陳列室で見たまゝの繪が、薦包で、家までとゞけられた。僕は嬉しかつたが、恐らくあの時、既に僕の心に取付いて了つたらしいもう一つの欲望、あの巨きな眼は一體何なのか、何とかして確かめてみたいものだといふ厄介な欲望は、どう片付けていゝか解らなかつた。丁度、長い仕事に手を付け出してゐた折から、違つた主題に心を奪はれるのは、まことに具合の悪い事であつたが、それは氣の持ち樣でどうにでもなる。どうにもならぬのは、書く爲の樣々な條件に思ひ及ぶと、ゴッホについて書くといふ樣な事は、僕には殆ど甑篭から駒を出したいと希ふのに似て來るといふ事であつた。一方、感動は心に止まつて消えようとせず、而もその實在を信ずる爲には、書くといふ一種の勞働がどうしても必要の樣に思はれてならない。書けない感動などといふものは、皆嘘である。たゞ逆上したに過ぎない、そんな風に思ひ込んで了つて、どうにもならない。

＊

この前、「モオツァルト」について書いた時も、全く同じ窮境に立つた。動機は、やはり言ふに言はれぬ感動が敎へた一種の獨斷にあつたのである。あれを書く四年前のある五月の朝、僕は友人の家で、獨りでレコードをかけ、D調クインテット（K. 593）を聞いてゐた。夜來の豪雨は上つてゐたが、空には黑い雲が走り、灰色の海は一面に三角波を作つて泡立つてゐた。新綠に覆はれた半島は、昨夜の雨滴を滿載し、大きく呼吸してゐる樣に見え、海の方から間斷なくやつて來る白い雲の斷片に肌を撫でられ、海に向つて徐々に動く樣に見えた。僕は、その時、モオツァルトの音樂の精巧明晳な形式で一杯になつた精神で、この殆ど無定形な自然を見詰めてゐたに相違ない。突然、感動が來た。もはや音樂はレコードからやつて來るのではなかつた。海の方から、山の方からやつて來た。そして其處に、音樂史的時間とは何の關係もない、

聽覺的宇宙が實存するのをまざまざと見る樣に感じ、同時に凡そ音樂美學といふものの觀念上の限界が突破された樣に感じた。僕は、このどうしても偶然とは思はれない心理的經驗が、モオツァルトに關する客觀的知識の蒐集と整理とのうちに保證される事を烈しく希つたのであるが、さういふ事を企てるのには、僕にはやはり惡條件が出揃つてゐるといふ始末であつた。久しい間何や彼ややつてゐる內に、讀者の眼には一應モオツァルト論めいて見えるものが書き上つたわけだが、僕にしてみれば、それは何事をか決定的にやつつけた事であつた。評論でも書かうといふ男だから、元來考へ事は嫌ひな方ではなかつたが、生來我が强く短氣なお蔭で、人生に生きる智慧の最上の部分は、何かをやつつける事のなかに隱れてゐると、早くから經驗によつて知つた。併し、人生の評論化を全く斷念するのは、長い間の奇妙に手間のかゝる仕事であつた。

＊

惡條件とは何か。

文學は飜譯で讀み、音樂はレコードで聞き、繪は複製で見る。誰も彼もが、さうして來たのだ、少くとも、凡そ近代藝術に關する僕等の最初の開眼は、さういふ經驗に賴つてなされたのである。飜譯文化といふ輕蔑的な言葉が屢々人の口に上る。尤もな言ひ分であるが、尤も過ぎれば嘘になる。近代の日本文化が飜譯文化であるといふ事と、僕等の喜びも悲しみもその中にしかあり得なかつたし、現在も未だないといふ事とは違ふのである。どの樣な事態であれ、文化の現實の事態といふものは、僕等にとつて問題であり課題であるより先きに、僕等が生きる爲に、あれこれの退つ引きならぬ形で與へられた食糧である。誰も、或る一種名狀し難いものを糧として生きて來たのであつて、飜譯文化といふ樣な一觀念を食つて生きて來たわけではない。當り前な事だが、この方は當り前過ぎて嘘になる樣な事は決してないのである。この當り前な事を當り前に考へれば考へる程、飜譯文化などといふ脆弱な言葉は、凡庸な文明批評家の脆弱な精神のなかに、うまく納つてゐればそれでよいとさへ思はれて來る。愛情のない批判者ほど間違ふ者はない。現に食べてゐる食物を何故ひたすらまづいと考へるのか。まづいと思へば消化不良になるだらう。

＊

今でも勿論あると思ふが、美術學校に彫刻科の參考室といふ部屋があり、ギリシヤやルネッサンスの名作の見事な模造が並んでゐる。僕は青年時代、氣がめ入つてやり切れなくなると、よく其處へ出かけたものだ。あの驚くべき部屋が公開されてゐるのを知る人は稀だつたらしく、僕は其處でいつも獨りであつた。堂々たる巨像が、處せましと亂立した、小汚いひつそりとした部屋には、いつも得體の知れぬ嵐が吹いてゐる樣に思はれた。僕は樂しかつたのかそれとも辛かつたのか解らない。恐らく喜びも悲しみも、怒りも疑ひも、青年期の一切の想ひが嵐のなかで湧き立つてゐただらう。僕は、ミケランジェロの《夜》の前に立ち、僕に似た幾多の憐れな青年の手に撫でられて黑光りのした石膏製の下腹を撫で、いつかイタリイに行き、メディシの墓の前に立てる時があらうとも、現在の昂奮はもはやあるまいと、まるで自分に誓ふ樣に呟いたものだ。彫刻の何たるかを始めて僕に敎へてくれたのはミケランジェロだ、さう言つたところで誰も信用してはくれまい。構はない。他人が信用してくれない言葉を、人は、やがて自分でも信用しなくなる、僕には、そちらの方が恐ろしい。

僕が、飜譯文化の名狀し難い生態に廻り合ふのは、自分の經驗に基く自分の精神の或る特殊な遠近法によつてである。廻り合ふものは、實は僕自身に他ならないのかも知れぬ。と言ふのは、さうも言へるであらうといふ意味であつて、廻り合ふものが曖昧だといふ意味ではない。かく在る文化の巧妙なる批判家と、かく在るべき文化の漠然たる夢想家とは一つ穴の狢である。彼等が何處で文化の實體と廻り合ふ事が出來るのか、僕にはよく解らない。

＊

ゴッホが弟テオに宛てた書簡に關しては、ボンゲル夫人の編纂した膨大な全集があるとは豫

てから聞いてゐたが、式場隆三郎氏の御好意で、それが拜借出來たのは有難い事であつた。僕は、殆ど三週間、外に出る氣にもなれず、食欲がなくなるほど心を奪はれた。幾年振りでこんな讀書をしたらうか。以上書いて來た樣な事は、讀み疲れた僕の頭を去來した想念に過ぎないのであり、書簡の印象はと言へば、麥畑の繪に現れたあの巨きな眼が、こゝにも亦現れて來て、どうにもならぬ。ボンゲル夫人は、序文の冒頭に、ゴッホの弟の母親宛の手紙の一節を引いてゐる。「彼（ヴィンセント）は、何んと澤山な事を思索して來たらう、而も何といつも彼自身であつたであらう、それが人に解つてさへくれゝば、これは本當に非凡な著書となるだらう」いかにもその通りである。僕は解つた。だから「彼自身」の周りをぐるぐる廻る。「彼自身」が、サイプレスの周りを廻つた樣に。いかにもその通りだ、だからこれは告白文學の傑作なのだ。そして、これは、近代に於ける告白文學の無數の駄作に對して、こんな風に斷言してゐる樣に思はれる、いつも自分自身であるとは、自分自身を日に新にしようとする間斷のない倫理的意志の結果であり、告白とは、さういふ內的作業の殆ど動機そのものの表現であつて、自己存在と自己認識との間の巧妙な或は拙劣な取引の寫し繪ではないのだ、と。

＊＊

周知の樣に、ゴッホは牧師の子で、畫家として立たうと決心する前に、牧師にならうとして失敗した人である。手紙を通讀して解つた事だが、これは、意外な深さを持つた事實であつて、畫家の魂と聖者の魂との不思議な混淆は、彼の生涯を通して見られる樣に思はれる。

ボンゲル夫人の「思ひ出」によると、畫商をしてゐた伯父の店員となつてロンドンで働いてゐた時、（二十二歲）ゴッホはひどい失戀を經驗し、性格がまるで變つて了つて、寡言な憂鬱な孤獨を好む青年になつたと言ふ。彼に eccentric といふ言葉が、始めて當てはまる樣に思へるのはこの頃からだ、と夫人は附言してゐるが、彼にしてみれば、人生如何に生くべきかといふ事が、始めて centric な問題として現れたのはその頃だといふ意味であり、それはその頃から急に倫理的宗教的になつた彼の手紙が證明してゐる。彼の畫に eccentric といふ言葉が當てはまらない樣に、彼の手紙も決して eccentric ではない。彼の日常生活は、傍人の眼には確かに eccentric に見え、彼自身も亦それをよく承知してゐたに相違ないのであるが、それは、手紙では、嚴格な內的倫理の投影の中にしか殆ど現れて來ないのである。年齒を加へるにつれ、彼の行爲はいよいよ eccentric なものになり、その告白はいよいよ centric なものになる。

彼は、自分のうちに目覺めた大きな飢渴を癒すものは、聖書より他にないと次第に信じ込む樣になる。何ものかが牧師といふ天職に向つて自分を驅りたてると感ずる。だが、彼の手紙を讀む人は、彼の熱狂の背後に畫家が靜かに眠つてゐるのをはつきりと感ずる。聖書を研究し乍ら、彼の手は本能的に沙漠のエリヤを素描し、教理問題を讀んで想像に浮ぶものは、レンブラントの樣々な作品である。神學の勉强の辛さ退屈さを訴へ、嵐の海の色を生き生きと報告する。牧師となる正規の準備に一年餘り苦勞してみたが物にならず、福音を說くのに、人間どもが發明した約束など無用な筈である、と說教師として單身ボリナージュの炭坑に赴く。「人生を呑氣に送り過ぎるなどと不平を言つてはいけない。僕の暮しだつて先づ同じ樣なものだ。人生は短かかないよ、誰かが『汝を縛め、汝の欲せざる處に連れ行かん』そんな時は、いづれやつて來る」（No. 23. ボンゲルの整理番號による、以下同じ）彼が豫言した通りになつた。但し「誰かが」とは彼自身が、であつた。

「ボリナージュといふ處には、繪なんぞ一枚もない。繪とは何か知つてゐるものもない、とまあ言つてよからう。從つて、ブラッセル以來、美術に關するものには何一つお目にかゝらないのは勿論なのだが、そんな事はどうでもいゝ、此處の田舍が實に繪の樣なのだ、實に獨特なのだ、あらゆるものが、昔あつたが儘の事を語りかけ、特色に充ちてゐる。クリスマス前の陰氣な日のつゞく近頃では、地面はもう雪で覆はれて了ひ、凡てのものが中世紀の或る繪を思ひ起させる。例へば農民畫家ブリューゲルやその他、

綠と赤、黑と白との奇妙な效果を實に素晴しく表現する術を心得てゐた多くの人達の繪を。僕は絕えずマリスや、デューラーの作品を思ひ起してゐる。茨が生ひ茂り、瘤だらけの異樣な根を張つた古木のある洞穴の樣な道がいくつもあるが、デューラーのエッチング《死と騎士》の道そつくりその儘だ。先だつて、白い雪の上を家路につく坑夫達の姿を、夕方の薄明りの中で見たが、物珍らしい情景であつた。彼等は、本當に眞つ黑だ。暗い穴から明るみに出て來る姿は、煙突掃除夫そつくりだ。彼等の家は、恐ろしく小さい、小屋と言つた方がいゝ、それが洞穴の樣な道の緣や、森の中や丘の斜面に散らばつてゐる。あちらこちらに、苔の生えた屋根が見え、夕方になると、小さな硝子の窓越しに、人なつつこい灯が點る。僕達のブラバントでは樫の矮林だし、オランダでは柳だが、此處に來ると、庭や畠や草地を廻る黑い茨の籬だ。今はその上に雪が降り、福音書の頁の上の黑い活字の效果を出してゐる」(No. 127)

これは說教師の眼ではない。

*

貧しい人達への、彼の常規を逸した獻身は、說教師の體面を無視したものと解され、彼は、自分が信じた唯一の職業から追放される。この決定的な幻滅によつて、彼は本性を現す。再び幻滅しない爲に、新たな理想に筋金を入れる爲に、彼は、絕望した眼に、世の中の通念の馬鹿馬鹿しさを燒き付ける。書簡は、突然轉調し、この告白文學に必須な特色ある序文の樣なものが現れる。

「君自身も一緒にゐたのだからよく承知してゐる筈だ。知慧と最善の意圖の下に、物事がどんな風に企圖され、議論され、考慮され、語り盡されたかを。而も何といふ慘めな結果になつたか、仕事全體が何といふ滑稽な、徹底した馬鹿馬鹿しさを暴露したか。思ひ出すと未だ身震ひが出るよ。あんな悪い時期は嘗てなかつた。それに比べれば、こんな貧しい田舍で、未開な環境で、骨を折つてその日その日を送つてゐる方が、遙かに有難いし、面白い。好意に充ちた、賢明な忠告に從ふといふ事も、同じ結果を生むのぢやないか知らん。あんな經驗はひど過ぎるよ、傷手も、悲しみも、苦しみも、ちと大き過ぎる。どつち道、あんなに高く付いた經驗をしては、賢くなるまいとしても、ならざるを得ない。あれから學ばなくて、一體何から學ぶのだ。《目前のゴールに突入》しようと努める、これが當時の言ひ草だつた、まさにさういふ狙ひこそ、今後決して欲しがらないものだ」

「自分の現在の生活が、もつといゝものだつたらと希ふ。希ふからこそ、改善は悪自體より、もつと悪くはないだらうかと恐れてゐるのだ」

「君は、かう言ふだらう、文字通り從つて欲しいと思つて忠告するのではない、のらくらと日を送つてゐるのが好きなのではないのかと心配になるのだ、はつきり決まりをつけた方がいゝと思ふので忠告するのだ、と。が、僕としては、この《怠惰》は、どうも一種妙な怠惰だと思つてゐるのだ。これに就いて、自己辯護をする事は、ちよつと難かしいが、君が早晩別の見地から、これを見てくれる樣にならなければ、僕はどうにも殘念なのである。怠け者だと言ふか、よろしい、では御忠告通り、例へばパン屋になりませうといふのが正しいかどうか、僕には解らない。成る程はつきりした返答には違ひない(電光石火、パン屋にでも床屋にでも圖書館員にでもなれると假定しての話だ)、だが、同時に馬鹿げた返答でもあらう。驢馬に乘つてゐると叱られて、驢馬から下りて驢馬を肩にかついで行く男に、どうやら似た樣な返答だ」(No. 132)

「或る程度まで、君は僕に對して赤の他人になつた、君が考へてゐる以上に、僕も、亦君に對して同樣になつた——君が僕に五十法送つてくれた事を、エッテンで知つた。金は正に受取つた。澁々と、悲しい想ひで。だが、僕は、石の壁にぶつかつて、どうやら滅茶滅茶になつてゐるのだ。他にどうしやうがあるか——何時の間にか、僕は、家庭で、一種我慢のならぬうるんな人物、少くとも彼等には信用して貰へぬ人間になり了つた、といふ事であれば、何とかして誰かの役に立たうとしても無駄ではないか。だから結局、何處かへ行つて了つて、適當な距離を保つてゐる事、即ち君達全部にとつて、僕といふ人間は存在しないといふ事にする、それ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

が道理に適つた最上の行爲だと考へる。僕等人間にとつて、逆境にあり不運に見舞はれる時期が辛いのは、鳥達にとつて羽の脱け代る時期が辛い様なものだ。その中にじつとしてゐる事も出來れば、新しくなつて其處から出て來る事も出來る。が、何れにしても人前でやる事ぢやない、決して愉快な見物ではないからね。やるべき事は唯一つ、身を隱す事、よろしい、さういふ事にしよう。」

「もう五年以上も、何年だかはつきり覺えてもゐないが、僕は職もなく方々をうろつき廻つてゐた、あの頃から墮落したのだ、何にもしやしないのだ、と君は言ふが、本當か。時にはパン代ぐらゐは稼いだ、時には友達が惠んでくれた。行き當りばつたりに、好運に出會へば出會つた樣に、自分で出來たら出來た樣に、僕は暮して來た、それは本當だ。僕が多くの人の信用を失つたのは本當だ。僕の經濟狀態は悲しむべきものであつた事は本當だ。未來はたゞもう眞つ暗なのも本當だし、どうにか仕樣があつたかも知れぬのも本當だ、パンを稼ぐのに時間をとられたのも本當だし、僕の勉强が慘めな希望のない狀態にあり、僕の入用は僕の所有を限りなく超えてゐるのも本當だ。併し、これが君の言ふ墮落か、何にもしない事なのか」

「僕が物事を否認すると考へてはいけない、僕は寧ろ自分の不忠實に忠實なのである。變つた事は變つたが、僕はやつぱり僕なのだ、僕の唯一の關心は、どうしたら世間の役に立つ身になれるだらうか、何かの目的に適ふ人に、何か善い事の出來る人になれるだらうか、どうしたらもつと稼いで、一定の題目を深く究める事が出來るだらうか、それだけなのだよ、一途に思ひ込んでゐるのは。ところで、われとわが身を顧れば、貧窮の俘囚で、職にはあり付けず、必要物は手のとどかぬ處に在る。あんまり樂しくはなからうぢやないか。すると、友愛と强い眞面目な愛情があるべき處に、或る空虛があるのを感ずる。倫理的精氣さへ蝕む樣な恐ろしい落膽がやつて來る。運命は愛情の本能もせき止める樣に思はれ、嫌惡の情が込み上げて來て、息が詰まる。あゝ、何時までつゞくのか、と叫ぶ。扨て、何を語ればよいのか。內部の思想が、外部に現れるなどといふ事があるのだらうか。僕等の魂の中には大きな火があるのだらうが、誰も暖まりにやつて來る者はない、通りすがりの人は、煙突から煙が少々出てゐるのを見るだけで行つて了ふ」

「籠の鳥も、春になれば、何かの目的に仕へねばならぬところだとはよく承知してゐる。何かする事があるとはよく感じてゐる、が出來ないのだ。それは何か。彼ははつきり覺えてゐない。彼は漠然とした考へを抱き、獨語する、他の鳥達は、巢を作り、卵を生み、子供を育てる、と。そして頭を籠の橫木にぶつけてみるが、籠は相變らず眼の前にあり、彼は苦しみの餘り氣が變になる。通りかゝつた他の鳥が言ふ、この怠け者を御覽、氣樂にやつてゐるらしいと。さやう、囚人は生きてゐる、死にはしない、彼の內部に何が起つてゐるかは、外から見ては解らない、彼の健康は大丈夫だし、陽が當れば、多少は元氣にもなる。が、やがて、渡りの時が來る。メランコリアの發病——籠の世話をしてゐる子供が、何でも欲しいものはある筈なんだ、と言ふ、だが、彼は、籠を透かして、雷雨を孕み、暗雲低迷する大空を見据ゑてゐるのである」

「僕等を幽閉し、監禁し、埋葬さへしようとするものが何であるかを、僕等は、必ずしも言ふ事が出來ない、併しだ、にも拘らずだ、僕等は、はつきり感じてゐる、何かしら或る棚だとか扉だとか壁だとかが存在する、と。こんな事は皆空想か、幻想か。僕はさうは思はぬ。僕等は訝る、あゝ、これは長い事なのか、永遠にさうなのか、と。君は、何がこの監禁から人を解放するか知つてゐるか。それは深い眞面目な愛なのだ」(No.133)

*

理想を抱くとは、眼前に突入すべきゴールを見る事ではない、決してそんな事ではない、それは何かしらもつと大變難かしい事だ、とゴッホは吃り吃り言ふ。これはゴッホの個性的着想といふ樣なものではない。その樣なものは、彼の告白には絕えて現れて來ない。ある普遍的なものが、彼を脅迫してゐるのであつて、告白すべきある個性的なものが問題だつた事はない。或る恐ろしい巨きなものが彼の小さな肉體を無

理にも通過しようとするので、彼は苦しく、止むを得ず、その觸覺について語るのである。だが、これも亦彼獨特のやり方といふ樣なものではない。誰も、さういふ具合にしか、美しい眞實な告白はなし得ないものなのである。現實といふ石の壁に頭をぶつけて了つた人間に、どうしてあれこれの理想といふ樣なものが必要であらうか。「それは、深い眞面目な愛だ」と彼が言ふのは、愛の說敎に關する失格者としてである。

一年餘り經つてからの手紙にこんな文句がある——「世に捨てられ、友もなく、ポケットには金もなく、半病人の慘めな姿で街を歩いてゐて、僕はよく商賣女達を見ては、一緒について歩ける男を羨んだものだ、境遇から言つても、經驗から言つても、あれはまるで自分の妹達だ、と感じたものである。君もわかつてくれてゐるだらうが、これは、僕の深處に根を張つた古い感情だ。子供の時でさへも、半ば褪色して了つた樣な女の顏を、限りない同情を籠めて、いや尊敬の念さへ抱いて眺め入つたものだ。眞實の生活は、こゝにその印しを付けて置いた、その通りの事が顏には書かれてゐたのだよ」(No. 164)

ボリナージュが、彼のこの「古い感情」を殘酷に試した。彼は普通な意味で所謂幻滅を味つたのではない。そんな事で濟むのなら、易しい事であつたが、彼の言ふ「高く付いた經驗」とは纏ひ付いた觀念が、鳥の羽の樣に脫落し、「古い感情」が、寄る邊のない不安の裡に、裸で生きてゐる事を厭でも確かめねばならぬ事であつた。彼の胸の裡の言葉なき愛が叫ぶ、何處にどんな言葉を求めたらいゝか、と。これがこの異樣な畫家の門出である。言はば、この人には、繪のモチフは、人生のモチフより決定的に遲れて來た。彼の繪畫技術獲得に關する殆ど人間業とも見えぬ勉强も、天賦の感受性の鋭敏も、これら兩者の間隙を充塡する事は出來なかつた樣に思はれる。これは彼の運命に這入つた割目の樣なものであり、人生が畫布の上に移され、突如としてその價値の性質を變するといふ奇蹟に關して、最大畫家が得た樣な表現の陶醉と自足とは、遂に彼を見舞はなかつた樣である。繪畫は目的ではない、手段に過ぎないと、熱狂の合ひ間に、何者かが彼に囁く。では何の爲の手段か。不思議な事だが、それを知る爲に、この現實家には、自分に殘された唯一の現實の技術、色や線に關する技術しか信用出來なかつた。彼の繪から感じられる、何かしら一種の非完了性は、彼の早世に由來するのではない、繪を描きつゞけてゐる限り、恐らく彼はテオの爲に告白文學を綴つたであらう。其處に何かがある。そんな風に僕は考へるのである。

**
*

彼の眞劍な畫家修業は、先づブラッセルで始められた。二十七歲の時だ。彼は三十七歲で自殺した。三十歲の時の手紙の一節——「愼重に考へた上の推定だが、僕はあと六年と十年の間位しか生きられぬ」(No. 309)だが、修業時代の書簡は、繪について語る同じ熱情で戀愛について語り始める。相手は、兩親のゐるエッテンに歸省した時、知り合つたアムステルダムから來てゐた從姉であつた。彼女の父もやはり牧師であり、當時、彼女は子供を持つた寡婦であつた、と書くのも無駄な樣である。彼女は、ゴッホに熱烈な戀愛論を書かした偶然な機會以上のものではない。事件は彼の心の裡だけで起つた。

彼はロンドン時代の戀愛を回想して言ふ、「與へようとばかりして、貰はうとは思はなかつた、何と愚かな、間違つた、誇張された、高慢な、短氣な戀愛であつたらう、戀愛では、ただ相手に與へるだけではいけない、相手からも貰はなくては」(No. 157)今度も、この偏窟な風來坊は、相手から「いゝえ、駄目です」といふ言葉しか貰へなかつたのだが、ロンドン時代の沈默に引きかへ、この言葉は心に火をつけ、手紙はまるでこの言葉を主題とする烈しい遁走曲の樣に鳴り出す。そしてこんな風に終る——「この《いゝえ、駄目です》が、以前は知らなかつたいろいろな事を敎へてくれた、第一に自分の途方もない無智、次に女には女の世界があるといふ事、其他である。それから、世の中には生存の手段といふものがいろいろあるといふ事だ。處で、有罪なりといふ證據がなければ、何人も無罪である、と憲法が規定してゐる通り、生存の手段を持たぬといふ證據がない限り、そ

の人は何か生存の手段を持つてゐると見做すのが、思慮ある人々の態度だらうではないか。この男は生存してゐる、眼の前にゐる、話しかけてもくる。彼が生存してゐる證據には、彼はある事件、例へば今度の戀愛事件に興味を持つてゐる――さういふ風に言ふべき處だ。彼が生存してゐる事が明白であり、疑點がないものである以上、彼の生存は何等かの手段に依つてゐる筈であり、彼はどうにかかうにかやり遂げてゐるのだし、働いてもゐる筈だ、それは自明の理として受取らう、生存の手段もなく生存してゐる男だなどと疑ふまい――さう言つてくれるべき處だ。併し、人々は、特に今度の事件に出て來るアムステルダムの或る男なぞは、決してさういふ風には推理しない。彼等は、問題の人物の生存を信ずる爲に、先づその人間の手段を知りたがる、處で、その問題の人物の生存なるものは、その手段を彼等に證明しないといふわけさ」(No. 156) この自己辯護は眞劍過ぎて、一生、誰も信用してはくれなかつた。

弟を除いては、エッテンの一家も、アムステルダムの一家も、こぞつて彼の戀愛に反對した。彼は忠告攻めに會つてうんざりする。「忠告の眞反對の事をやつてみるのは、非常に實際的な事で、滿足すべき結果を見る事がよくあるのだよ。それだからこそ、いろいろな場合、忠告といふものを求めるのも無駄ではないのだ、だが、さういふ風にひつくり返さないで、そのまゝ役に立つ忠告もある、これは實に稀れではあるが、やはり特殊な性質があるから、最も望ましい忠告だ。前の方の忠告は、何處にでも、いくらでも見付かるが、後の方のは高價である。前者はたゞだ。受取人の手元まで無料で何噸でも配達してくれる」(No. 156) 彼は、あきらめない。弟に旅費を貰ひ、アムステルダムに最後の談判に行く。彼は、忠告の眞反對を試みたが無駄であつた。この時、ゴッホはランプの焰の上に手をかざし、かうして我慢出來る間でいゝから、女に會はせて貰ひたい、と伯父に賴んだといふ。伯父は、驚くべき「生存の手段」が證明されるのを見て、ランプを吹消し、拒絕した。この話は、どの傳記作者も傳へてゐる有名な話であるが、伯父との會見直後、その模樣を詳しく弟に報告してゐる手紙では、(No. 164) ゴッホはこれについて一と言も語つてゐないのであつて、餘程後になつてから、事の序でに、この事實に簡單に觸れてゐるのである。(No. 193) 彼自身にしてみれば、これは、明らかに極めて自然な、特に報告するにも當らぬ行爲だつたに相違なく、それは、彼の行爲自體より大事な事だ。飜つて思ふ。一體自分を語るのと他人を語るのと、どちらが難かしい事であらうか。いづれにしても、人間は、決して追ひ付けないもう一人の人間を追ふ樣に見える。といふ事は、パスカルの言ふ樣に「人間は限りなく人間を超える」といふ事になるのであらうか。かういふ難問に惱まぬ傳記作者、告白文學作者は何者でもない。

*

「――で、伯父は教會に行つて了つた。あすこに這入つて了へば、人間は堅くなり、石になる、僕は經驗で知つてゐる」「前にも書いたあの現實の或は現實離れのした教會の壁で、未だ僕は、魂の底まで冷え切つて了つたのを感じてゐるが、僕は、さういふ感情に今更驚き度くもない。そこで、かう考へた、どうしても女性に廻り合ひたい、愛がなければ、女がなければ生きては行けぬ、と。が又、あの女一人だと言つてゐたくせに、別の女が欲しいとは、をかしいではないか、まるで理窟に合はぬではないか、と君は言ふに違ひないと考へた。僕の答へはかうである、一體どちらが主人なのか、理窟か、それとも僕か。理窟が僕の爲にあるのか、僕が理窟の爲にあるのか。僕の理窟に合はぬところ、僕の分別の不足してゐるところ、そこに果して全く理窟と分別がないのであるか」(No. 164)

*

ボンゲルの全集を讀み進んで行くと、この邊りで、有名な「悲しみ」といふ素描の挿畫に出會ふ。凋んだ乳房をぶら下げた裸の女が、草原の石に腰かけ、顏を兩腕に埋めてゐる。下には、「此の地上に、女が獨り捨てられて絕望してゐるとは、どうしてそんな事になるのか」といふミシュレの言葉が書かれてゐる。この浪曼派文學の感傷的な圖案化の樣な素描は、當時の他の

素描に、既に現れてゐる自然や人間の眞形に關する烈しい懸念といちじるしい對照をなす。彼はかういふ觀念的な繪は一枚しか描かなかつた、從つて、恐らく彼の唯一の駄作と言へるのだが、どういふ深い仔細による駄作であるかは、彼の書簡といふ傑作に俟つ他はない。

《悲しみ》のモデルになつたジイン或はクリスティーヌと呼ばれた女は、彼の言葉によれば「暗い過去を持つた」「牧師の所謂淪落の女」で、ハーグに來て間もない頃、これも彼の言葉だが、「冷い無慈悲な鋪道の上に忽然と現れた」のである。この痘瘡だらけの中年女は、母親と子供を抱へ、姙娠してゐた。彼は、分娩の手術の爲に病院の世話をし、やがて、赤ん坊を連れた女と同棲した。凡ては、弟からの僅かな仕送りだけに賴つて赤貧の中でなされた。「かういふ邂逅には、何かしら幽靈に出會つたと言つた風なものがある。少くとも思ひ出すごとに、黑い背景から現れる ecce homo に似た、一つの蒼ざめた顏、悲しげな顏が見え、他のすべては消える」(No. 262)

「嘗て僕は、六週間いや二ヶ月も、火傷した貧しい慘めな炭坑夫を看病した事がある。貧しい老人と一と冬、食を分ち合つた事もある。その他何をしたか、神樣は御存じだ。今度はジインだ。馬鹿な事をしたとも、間違つた事をしたとも、今以て考へてはゐない——若し僕が間違つてゐるなら、こんなに忠實に僕を助けてくれる君も亦間違つてゐる筈だ」(No. 219) シャルル・モオリスの「ポール・ゴーガン」によれば、パリでゴーガンに會つた時、ゴッホはやはりこのボリナージュ時代の思ひ出を話して聞かせたさうだ。ゴッホは、ボリナージュを去るに當り、自分の看護で一命を取り止めた坑夫に會ひに行つたが、額に傷痕を殘して回復した男の顏に、蘇つたキリストの幻を見た、さうゴッホは言つて、默つてパレットを取り上げた。ゴーガンも默つて、ゴッホの肖像を描き始めた。僕もやはりそこに一人のキリストの幻を見た、とゴーガンは言つてゐる。ゴーガンの樣な人の言ふ處に、恐らく誇張はないであらう。彼の淸澄な眼に見えた通り、まさにさういふ事であつたのである。例へば、ある評家の樣に、ゴッホを「慈善の狂人」と呼んでみた處で始まらぬ事だ。それに、慈善といふ觀念に纏はる優越感といふ樣なものを、彼の何處に搜せばよいか。これは浪曼派文學ではない。全く粧ふ事を知らぬ感情の强行なのである。「貧乏とはどういふものであるか、彼女(ジイン)は知つてゐる、僕も知つてゐる。貧乏はよいものでもあらう、悪いものでもあらう、構はぬ、僕は貧乏を賭してやつつける。海は危險であり、嵐は恐ろしい、それは漁夫がよく知つてゐる。だが、危險は、海に出ない理由には少しもなるまい。そんな哲學は、好きな人にまかせて置くだらう、嵐でも夜でも來るがよい。危險と危險に對する恐怖の念と、一體どちらが始末に悪いか。僕としては、現實の方がいいね、危險自體の方がいゝ」(No.193)

この無智な、神經病を患つた女、(ゴッホ自身も、一種の神經病の惱みを、この頃から訴へてゐる)「僕は彼女を決して悪くは考へぬ、善い事を嘗て見た事のない女が、どうして善い女になれようか」(No. 317) さういふ女との悪鬪は、一年半程も續いたが、遂に別れねばならぬ時が來る。彼の手紙は、無論、戀愛小說ではない。又、戀愛を心理學の對象にする暇も興味も彼にはない。手紙の文面から感じられるが、二人の間に、眞實な愛情が通じてゐた事に間違ひはないが、一向に働きのない三文繪かきの戀愛道德は、女には不可解なものだつた事も確かな樣で、決裂の原因は、結局はそこにあると思へるのだが、ゴッホの側に、藝術をとるか戀愛をとるかといふ樣な概念家が立つてゐたわけではなく、女性心理の奇妙な動きが、彼の視覺を逃れてゐたわけでもない。

ゴッホが女の問題で苦しんでゐる丁度その時、パリにゐる弟も亦或る不幸な女を救はうと決心し、先づ女が惱んでゐた、腫瘍の手術の世話をしようとした。まるで申し合せでもした樣な事が、弟の身にも起つたわけだが、恐らく事件は、尊敬する兄に倣はうとする弟の半ば無意識な發明だつたのである。弟は、畫商として成功する事によつて失つた藝術家の理想を、兄の裡に見、生涯兄の生計の爲に心勞しつゝ、兄の嵐の樣な精神の影響の下に生きた。嵐が止んだ時、弟のうちの一番大事なものも死んだ。肉體はその後、半年しか生きてゐなかつた。扨て、當時、

兄は弟にこんな忠告をしてゐるのである。「手術は恐らく辛いだらう。若しも僕が君なら、今後どんな職を見付けてやるかといふ樣な事は、女にはあんまり言はない樣にするな。何しろ足が足だから、未來の事は解らないよ。解らないなら、解らないまゝにして置く方がいゝ。こんな事を言ふといふのも、例へば苦痛のひどい時なぞ、まるで間違つた何か固定觀念めいたものを、女が頭の中に作り上げて了ひはしないかと思ふからだ。かうしなければならない、あゝしなければならない、そんな考へが病氣の女にはよく取付くものだよ。さういふ考へが、女を、われとわが眞心から發する感情に對して、頑固に構へさせて了ふのだ。君にしてみれば、女の將來の自由と獨立を希へばこそ、女の職業についての考へも口にしたわけで、皆君のデリカシイから出たものだ、ところが、女はそれを、君が冷淡になつたと取るだらう、決してそんな事はないのにね。これは君には辛い事だらう。どうも曖昧なものの言ひ方をしてゐる樣だが、併し、女はデリカシイといふものを解さぬものだ、ユウモアが解らぬ以上に解らぬものだ」(No. 204) これは、自分の女に關するゴッホの診斷書と見ていゝ樣である。生計の窮乏を救ふ爲、行詰つた繪の道を打開するのに、田舍の畫題が絶對に必要と信じた爲、ゴッホは、女を連れて、或は暫く女と別れてドレンテに移らうと決心したが、彼の提案を、女は決定的に誤解したと推定していゝ樣である。

「このまゝ一緒に暮す事は出來ない、お互に不幸になるばかりだ、と二人は感じた、が、又お互にどんなに強く愛し合つてゐるかも僕等は感じたのだよ。僕は遠い田舍に出掛け、自然と語り合つた——君はあそこの景色を知つてゐるだらう、堂々とした、靜かな素晴しい樹木がある、それと並んで、不快な綠色の玩具の樣な別莊、隱居したオランダ人が、精一杯下らぬ空想を働かせて作り上げた、凡そ愚にもつかぬ恰好をした花壇やら亭やら車寄せやら——と、この時、沙漠の樣に限りなく擴つた草原の彼方から、次次に雲の塊が湧き上り、こちらにやつて來た。石炭殼を敷いた黑い小徑に緣どられた運河の向うの、木立に圍まれた田舍家の家並に、先づ風がぶつかつて來た。樹木は全く素晴しいものであつた。そのめいめいの人物の中に、と言ふのはその一つ一つの樹木の中にといふ意味だが、劇があると言ひたい處だつた。そんな樹木も、風雨に打たれ出すと、それだけを眺めるより全體の風景の方が一層美しくなる。雨に濡れ、風に揉まれて、あの小さな愚劣な別莊も、奇妙な性格を帶びて見えて來るからである。眺めてゐると、ふとこんな考へが浮んだ、どんなに愚かな因襲的な人間でも、偏窟な氣紛れな人間でも、若し本當の悲しみに突き當れば、災厄に動かされゝば、一種獨特なタイプの劇的人物になるのではあるまいか。又、こんな考へも頭を掠めた。現代の墮落した社會が、新生の光を背景に眺められる瞬間に、どんなに大きな憂鬱な影繪となつて浮び上るかと。確かに、僕には、自然の嵐の劇と一生の悲しみの劇ほど印象の强いものはない——あゝ、この世には影繪の形と輪郭とを示すに足りるだけの僅かばかりの光は、僅かばかりの幸福はなくてはならぬ。其他は暗いまゝでいゝ」(No. 319)

「親愛なる弟よ——僕がどんなに他事を忘れて、ひたすらあの女を救はうと、わが身を捧げて來たか、その僕の感情を、君が正確に知ることが出來るなら——僕の憂鬱な人生觀、何もそれが爲に、僕は人生に無關心になつたわけではない、それどころか、悲しみを忘れ、悲しみに無關心でゐるより、悲しみを感じてゐるのをよしとする、さういふ僕の人生觀が、君に正確に感じられるなら——幻の中にではなく、悲しみの崇拜の中に、いかに僕の心が平靜を得てゐるかを、君が正確に感じとるならば、その時には、弟よ、僕の魂の奥底は、君の眼にさへ、君の想像以上に異質なもの、人生を離脱したものと映るだらう。今後は恐らく、あの女に就いて、もう多くを語るまいと思ふが、彼女のことは、何かにつけて考へつゞけるだらう」(No. 320)

こゝには、《悲しみ》と題する彼自身の自慢する素描が語るより、遙かに複雜な觀念が現れてゐる。これは當時の彼の繪畫的手腕が未熟であつたといふ樣な問題ではなささうである。ここには、繪畫に表現するには非常に難かしい、殆ど全く不適當な何ものかがある樣に感じられる。それにしても、僅かばかりの光とは何か。

それは何處から來るのか。少くとも彼の所謂「平靜」といふ奇妙な心的平衡は少しも平靜なものではあるまい。

＊

ドレンテからの手紙は、成る程女についても多くの事を語つてはゐないが、「『女と別れる毎に、自分のなかで何かが死ぬのを感じた』とガルヴァニが言つたとき、彼は大眞面目だつたのだよ」(No. 326) と、彼はいかにも辛さうに書く。間もなく又ヌエネンの兩親の家に還り、女に會ひにハーグに行つたが、弟への簡單な報告は（弟も既に女と手を切つてゐた）次の樣な文句で終つてゐる。「どうにかやつてゐるのだから、もう何とかしてやる必要はないとは僕は言はぬ——併し、僕も君も、いや寧ろ僕だが、もうあんまり遠くまで行つて了つた。貧しい捨てられた病氣の女を救ふ爲なら、人は、ずゐ分遠くまで、以前の場合に既に言つた事を繰り返すのだが、限りなく遠く行けるものだ。だが一方、僕等は限りなく殘酷にもなれるものだ」(No. 330) 彼とジインとの交渉は、これが最後である。

次いで、彼の戀愛劇の大詰に、新しく一人の女性が登場するのであるが、殘念乍ら、彼の心の裡では、何かが既に死んでゐた。彼女は良家の古風な嚴格な教育のお蔭で、戀愛なぞ考へてもみない信心深い中年の女性であつたが、ゴッホは、彼女を遂に口說き落し、結婚の申込みに成功した。「この女には、まあもう十年ばかり早く會ふべきだつたよ。下手糞な修繕屋に弄り廻されたクレモナのヴァイオリンと言つた風なものだ。會つた時にはもう既にすつかり狂ひが來て了つてゐたのさ。だが、元々、たんとはない名品なのだから、今でも、いろいろ難はあるが、どうしてけつして安價ではない」(No. 37)

結婚話は、女の一家の大反對に會ひ、女は逆上して毒を呑む。

「靜かに話をしてゐる時など、彼女は、死んで了ひたいとよく言つてゐたが、氣にもとめなかつた。處が、或る朝、滑つて轉んだ。身體が弱つたんだなと、最初は思つたが、だんだんいけなくなる。と言へば、もう後は分つただらう。ストリキニイネを呑んだのさ。ほんの少しばかりね。でなければ、解毒劑にクロロフォルムかロオダノムを一緒に呑んだのだ」(No. 375) かういふ苦い殘酷な調子で彼が戀愛を語つた事は嘗つてなかつたのである。これは戀愛と言ふよりも一種の復讐の樣に見える。ジインから受けた傷口が疼くのだ。

世話になつてゐる弟には、こんな口の利き樣をしてゐる——

「君は僕に妻を呉れなかつたではないか、子供も呉れなかつた、仕事も呉れなかつたではないか。成る程金は確かに呉れたよ。だが、妻も子も仕事もない男が、金に何の用がある。君の呉れた金は無駄金だ」(No. 358) 父親も、久し振りで還つて來た息子の不機嫌を持て餘す。テオに宛てた父親の手紙の一節——「自分の eccentricity が齎した結果をよく考へ、元はと言へば、多くの場合、自分が惡かつたかも知れぬと考へる勇氣が、彼にあつてくれたらと思ふよ。自責の念などといふものがてんでないらしい。たゞ、一途に他人が我慢がならないのだ。殊にハーグの紳士達がね。何事であれ、反對したいといふ發作にかられるらしいから、腫れ物に觸る樣にしてゐなければならぬ」——當人の言分「兩親が僕の事を本能的に（意識的にとは言はぬよ）どう考へてゐるかを、僕は感じてゐる。僕を家に入れてみて、丁度大きな野良犬を入れたのと同じ恐怖を、兩親は感じてゐるのだ。犬は濡れた足で部屋に馳け込む。ちと禮儀といふものを知らな過ぎるんだな。邪魔にはなるし、無暗に吠え立てるし、要するに汚ならしい畜生なのだ。よろしい。だが、この畜生には人間の經歷がある。犬には違ひないが、人間の魂、それもひどく敏鋭なやつを持つてゐる。お蔭で、人々にどう見られてゐるかが感じられる。普通の犬に出來る藝當ぢやない」(No. 346)

ゴッホの所謂「現代の憂鬱な影繪」で、彼の一番近くにあつたものは、牧師と畫商の影繪だつた筈だが、その輪郭を浮出させる彼の言ふ「新生の光」があつたわけではない。この不思議な犬は何に吠え付いてゐるか明らかではないが、父親が息子が犬である事に苦しむ以上に、犬は自分が人間である事に苛立つてゐる事は確からしい。これは心理小說家には、向かない題

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com